井上長太夫伝

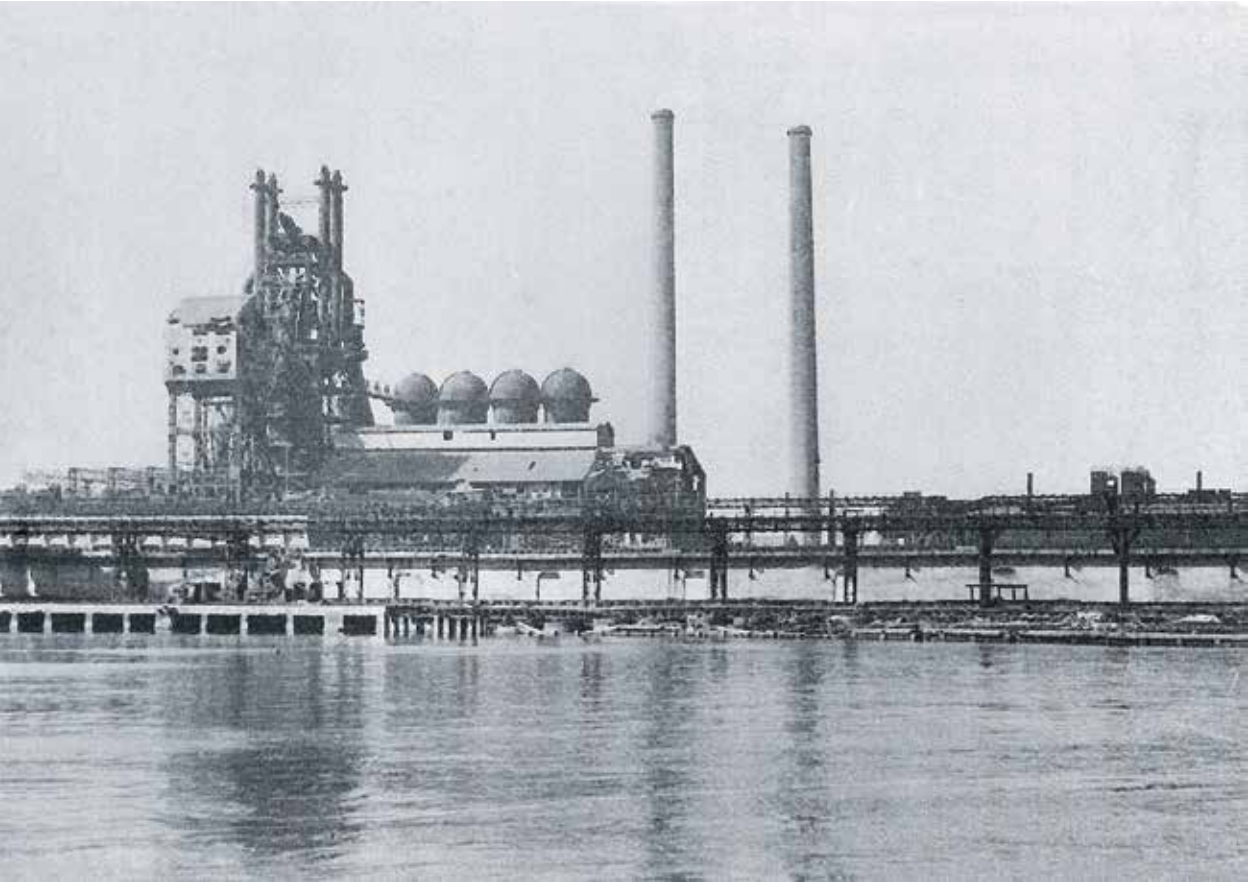
井上長太夫

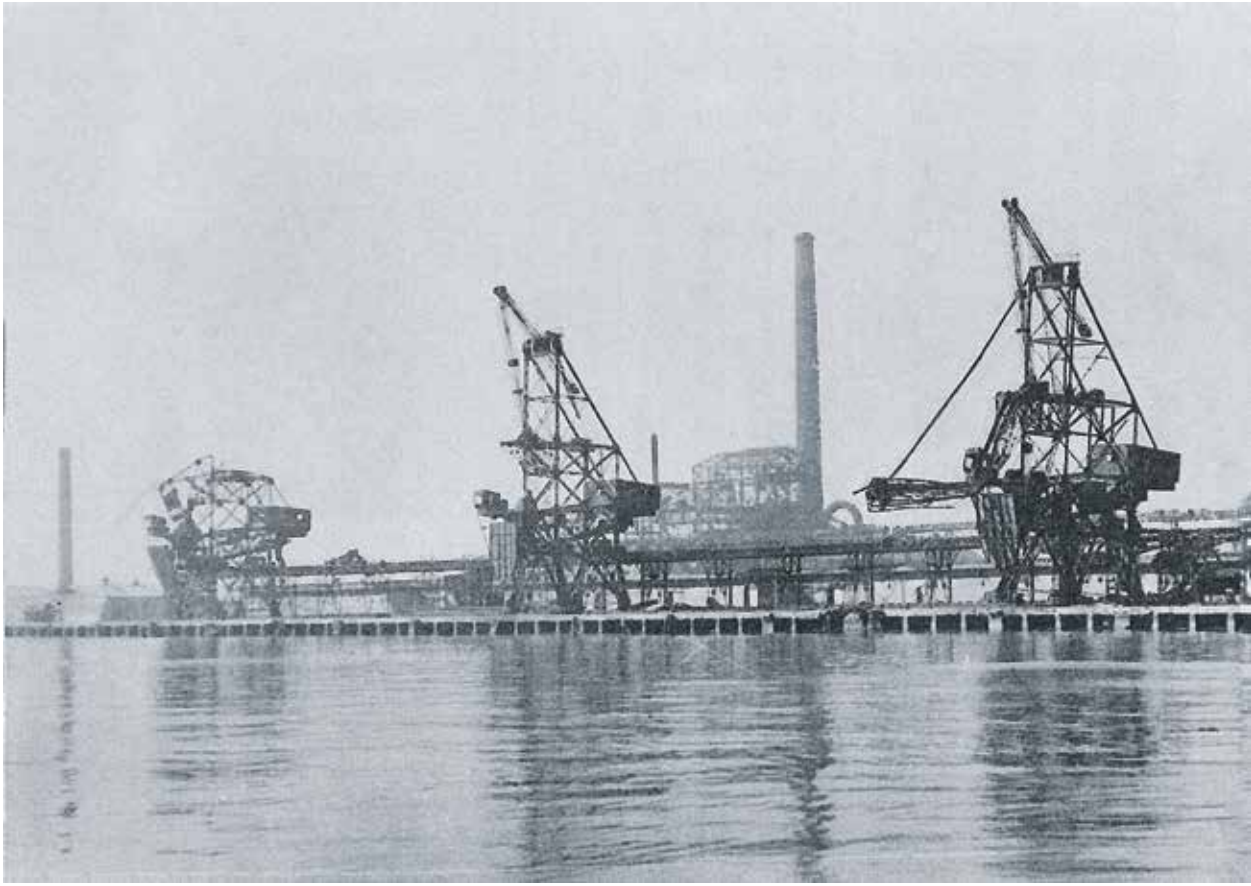
長太夫書

菊かほる昔 屋寓居にて

井上長太夫

昭和四十三年十一月三日
神戸製鋼所並びに鉄鋼連盟
其他の推薦により我国鉄鋼業界
の発展に尽した功労者として
勲三等瑞宝章を授かる



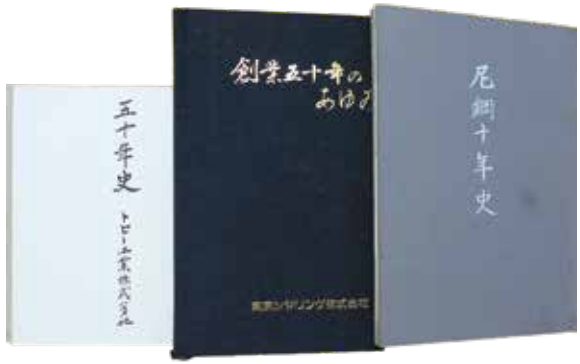


完成した尼崎製鉄所全景

叙勲の御挨拶

目次

一　はじめに
二　幼年時代
三　少年時代
四　鉄商として第一歩
五　青年時代
六　放浪時代
七　朝鮮時代
八　大阪九条に鉄商を開業
九　立売堀に店を移す
（東京シャーリング創立）
十　尼崎製鋼所の建設
十一　平炉の新設と鋼管製造に着手
十二　尼崎製鉄の創立
十三　終戦処理
十四　明光証券の創立
十五　追放解除で尼崎製鉄に復帰
十六　尼鋼の労働争議



十七　尼鋼労働争議の結末
十八　人生夕陽を尊ぶ
十九　井上専務渡欧記念の碑
二十　尼崎製鉄第一高炉火入れ記念の碑
二十一　おもいで１（鉄鋼新聞　長老対談　井上氏大いに語る）
二十二　おもいで２（宝塚ゴルフ倶楽部４０年史座談会より）
二十三　あとがき
二十四　年表（井上長太夫の生涯）

参考文献

・自著、自叙伝原稿
・叙勲の御挨拶「小傳」
・尼鋼十年史
・東京シャーリング「創業五十年のあゆみ」
・トピー工業「五十年史」
・鉄鋼新聞　昭和四十五年十一月九、十二、十六日
　「長老対談　井上氏大いに語る」
・宝塚ゴルフ倶楽部「四十年史」

はじめに

昭和四十八年二月、アメリカにいた私に突然、長太夫おじいさんが亡くなったとの連絡が入り慌てて帰国しました。

私にはいつも厳しい怖いおじいさんだったという記憶があります。今回、福田勝さんから前書きを頼むと言われ、改めて想い返してみると決してそうばかりではありませんでした。

一九六四年、東京オリンピックの年にメルボルンで開催されたボーイスカウトのジャンボリーに参加させてくれました。その時の団長がボーイスカウト日本連盟総長で、度々文中に出てくる久留島秀三郎さん（同和鉱業）でした。この久留島さんに孫たちはスカウトに入団させるように言われたと聞きました。私だけでなく京子も勇も海外のジャンボリーに参加しました。その狙いは祖父がヨーロッパやアメリカに視察旅行し、多くの新しいことを学び商売に大いに役立ったことから、若いうちに海外でいろいろと経験

してきなさいという教えだったと思われます。

まだ小学生時代に東京出張のおり、飛行機や特急の展望車で連れて行ってもらったり、宝塚ゴルフ倶楽部の家族会でザ・ピーナツを生で観たり、赤穂の対鷗館で家族会を開いたりと楽しい思い出ばかりです。

このような自伝を立派な本に仕立てていただき、福田勝さんには家族一同厚く御礼申し上げます。

井上　徹

井上長太夫
明治二四年一月二日生
兵庫県赤穂市加里屋五九七番地
井上長輔三男

幼年時代

私の少年時代までは屋号を北浜屋と称し、先祖代々の農業と畳屋を営み、山村、田畑貸家等を持ち、広い屋敷に大きな家で土蔵も二棟あって塩屋村屈指の旧家で裕福な家庭であった。

祖父長平は私が六歳の時、他界したが信仰心のあつい仏教徒で円満な人格者として世評のよい人であった。

家督を父、長輔に譲り隠居するや祖母を伴い一年以上に渡り親鸞聖人の足跡を巡拝され、当時の事だから乗り物としては駕籠より無いのに遠く信州、越後路まで歩いて鰯、蛤の化石とか聖人の残

されたという伝説に基づく奇特な箸、その他色々なものを持って帰って今も当家に保存している。

そのように恵まれた家庭に生を受けた私は十歳位までは至極のんびりと成育された。父長輔は真に性格らい落豪胆で反面、人情味の豊かな良い人であった。しかし農業は家督（今日の税金）を納めると残るところ少なく、年中ただ働きせねばならんという状態であった。父は農業を嫌がり、畳職を修行、坂内で一番の評判の立派な技量を持ち、弟子三人を養成していた。寺院とかいわゆる旦那衆の畳は全部父に注文があったほど繁盛していた。

しかし明治の革新時代というべき移り変わりの激しい時であったから、畳屋では「うだつ」が上がらないと思って米相場に手を出したものと察せられるが、何しろ田舎者で経済知識も無い者が「一攫千金」を夢みてのことだから買えば下がる、売れば上がるで損ばかり重ねていったらしい。当時の米相場といえば山の上から旗を振って高低を知らしていたので失敗の度ごとに山が減り、田畑

が人手に渡り、遂には家屋敷まで抵当に取られるという始末、そうなると自暴自棄に陥り、姫路、堂島、桑名等の米穀取引所を走り回り、家業を顧みないのでとうとう没落の途をたどるに至った。僕が十一歳の時、愈々倒産の憂き目に追い込まれ、家屋敷は勿論、家財までも売り払って新町の借家に引っ越した。

少年時代

新町に引越したのが僕が十二歳、高等小学校に入学した年であった。

祖母は怒って加里屋町清水の伯母の家に寄寓することになる。父は一向に反省の色もなく、僅かの金でも手に入ると闇取引に夢中で新町の家に移ると家出して姫路に畳職を働かせながら相場に

凝っていた。父は家出して行方不明で生活にも困るので木賃宿を営み、細々ながら母は家計を立てていたが、母の里の山本家、母の妹の縁付き先福田家に無心を頼み、米、味噌等を援助してもらいようやく生活を立てていたが、この間の母の苦労は並大抵でなく察するに余りあるのである。

年の暮れ、大晦日の晩、借金取りが入れ替わり立ち代わり催促に来るのを母が丁寧に断って漸く除夜の鐘が鳴り債鬼から解放され、そばの一杯でも食べさせてやりたいが金は無し、困った挙句、夜の商いに出る向かいの稲荷さんに話して後払いとして三杯のそばを母と弟と三人で除夜の鐘を聞きながら寒い炬燵の上で食べて年を越したが、あの暮れの悲惨な状況と母の温かい愛情は僕の終生忘れ得ない印象である。

私は泊り客があると宿帳を記入し、警察に届けに行くのが役目であった。時折父は帰ってきたが、二、三日すると又、姫路へ出掛けて行った。

母を助けながら高等小学校二学年を修了してから学校を退学した。その時に泊り客の一人で宿賃を払わない人があって、その人がのみ取り粉を作って、あっちこっち売り歩いていたが、岡山まで行くというので逃げられては大変と目付役兼売り子となって寒河、日生まで同道して行ったが日生で幾らかもらってごまかされて逃げられてしまった。

十四歳の春、丁稚奉公に出ることに意を決して神戸に奉公していた姉を頼って行く。姉の世話で最初に奉公したのは和田彦回漕店で桜井という人が経営していた。米国向け移民の扱い店であったが、一年足らずで閉鎖してしまった。主人の周旋で同業者の支配人が開いていた化粧品や雑貨の宮川商店に世話になることになったが、全く家庭的な小売店で将来の見込みが無いから半年位勤めて暇を取り大阪に行く。姉が村岡と結婚して臼田商会大阪出張所の主任として立売堀六丁目に店を持って、主として本店の仕入部といった仕事をしていた。大阪では最初、東洋貿易株式会社に就職、

社名とは違って汽船をチャーターして運航する運輸会社のような内容の会社であった。給仕として就職、一年余り勤めている内に会社が解散することになり退社して村岡の世話で安堂寺町の川合保蔵商店に奉公、鉄商としての第一歩を踏むことになったのである。

鉄商としての第一歩

川合庄助商店、この店は銅、真鍮等白物屋として大阪屈指の大問屋であったが、その妹に養子保蔵を迎え、鉄問屋を開業した新店であったから小僧の仕事から営業全般にわたり修行するには格好の店であった。

後藤、渡辺という二人の鉄屋仲間のベテランがいて可成り厳しく仕込まれ教えられた。朝起きると拭き掃除からランプ掃除、朝飯

を終えると使い走りや荷造り、配達等荷車を曳いて遠い野田方面まで配達にも行った。疲れた体をいとわず夜は泰西学館に通って勉強し、学校から帰ってからは習字の練習に励み、寝るのは十二時前後であった。このように一心不乱に修行と勉学に努めた。

主人は勿論、先輩諸氏のよき指導もあって店の信用も厚く得意先回りをするようになり、大阪砲兵工廠に店の代理人として活動出来るように成人した。

青年時代

十九歳の秋、川合商店を円満に辞し村岡に戻り村岡の後援で一本立ちとなり、大阪砲兵工廠に御用商人として出入りを許され、鉄工所二、三を得意先として活動を始めた。幸い開業早々から万事が好調に行き相当利益が上がったので往年、父が親戚に迷惑を掛けていた負債も皆済するし新町の家を新築し両親を喜ばし、母親を

連れて伊勢参宮、奈良、吉野、名古屋等を見物させた。最初のスタートから調子が良すぎたので御用商人連中との交際もあって年も若いし、つい茶屋酒を覚え遊蕩に走るようになり玉突きに熱中する余り、商売はおろそかになった。村岡義兄からやかましく忠告されるが馬耳東風、毎晩気まずくなると朝は説教を食う日が続いていた。ある時は大晦日に車屋と喧嘩して怪我をさし告訴されて西警察署に引張られ、義兄が来て膏薬を出して示談貰い下げてもらったこともある。二十一歳、徴兵検査の結果は甲種合格であったが抽選で免れたが身持ちが改らないのみならず、あちこちに借銭を作ったので遂に村岡から勘当を受け追い出された。この間、姉には筆舌に尽くし難い程、苦労をかけた。

放浪時代

村岡を出て懇意な玉突屋に下宿し株式に手を出し、初めはうまく

いったが間もなく失敗して友人から旅費を借り、東洋貿易株式会社時代の同輩　田口君を頼って東京に行く。東京駅に着いた時は懐中には僅かに五銭玉一つ。朝飯を食う金も無いという惨めさで、しかも小雨が降っていてどうすることも出来ない。田口君に会えば何とかなるだろうとやけくそ気分で車に乗って麻布の田口君を訪ねた処、中耳炎で駿台の病院に入院中とのこと、がっかりしたが仕方が無いので、又車夫に駿台まで走らせ、ようやく田口君に会った時はほっとした。いつまでも車を返さず様子が変わらないので気付いたらしく車賃を立て替え、食事も食べさせてくれた。同君の世話で橋本ブドウ酒店（東洋貿易の監査役）にしばらく厄介になり、牛乳配達もやれば株式屋等、約一ヶ年半面白いこともあり苦労も多かった。ついに食いつめて横浜に行って船会社のクルーマンの試験を受けパスしたので天長丸に乗り込み、横浜―小樽間の航海に従事することになった。泰西学館時代の友人で勝部孟雄君が僕を頼って東京にきて、一緒にクルーマンの試験を受

け三池丸に乗り込んだ。二航海して船が門司に臨時に寄港した時、碇泊中に衝突され神戸の船渠に入らねばならなくなって修理の為、引返した時に築港桟橋に姉と長衛が訪ねてきて、船は危険だから下船するよう切なる勧めに従い下船する。下船して何処かへ勤めねばならんと思っている内に病気になり、赤穂に帰り療養に努める。その内に村岡から朝鮮元山行きを勧められ美島商店に入店する。これが二十三才の秋であったが、ここまで約三年半、全くの放浪生活というべき時代であった。

朝鮮時代

元山（うるさん）美島商店に入社、丁度京三鉄道の工事の始まる前でもあり大いに重用された。一年半ばかり勤め正月に帰り、村岡とも相談の上、後援を得て二十五才の春、大正五年、元山井上商店を開業、金物、土木用等を商うことにした。

父が福田博二を小僧に同伴して来鮮する。その頃の元山は魚が安くて毎日鯛のさしみに鯛の茶漬けで初めは喜んでいた父も終りには飽きてきて鯛はいらんと言い出した。約一年半営業をするが、この頃が一番愉快に暮らした。呑気で殖民地気分旺盛だった。当時第一次欧州大戦で内地は異常なる好況だから引き揚げてはいかがかとの勧めがあり、元山の店を鶴間正祐氏に譲渡して大阪に引き揚げた。

大阪九条に鉄商を開業

大正七年二月、九条中通りに小店舗を持って鉄商を開業した。時に二十七才。

この年十二月ぬいと結婚式を挙げる。九条では店に僅かな鋼材を並べ、付近の鉄工所に売っていたが環境が良いので順調に進展していった。大正八年に元山鶴間君が引き揚げて来て、又店員とし

て協力することになり大正九年店舗を薩摩堀東ノ町電車道に面した所へ移し益々発展に向かった。欧州大戦（第一次世界大戦）の終戦と同時に景気は下落横這いを呈していた。鋼材も講和締結と同時に大暴落を来たし、トン八百円の丸棒が一挙に二百円位まで棒下げで大恐慌を来たしたが新店で手持ちも少なかったので無難に切り抜けた。

浅野製鉄の製品を初めて市販するに協力したことが縁となって、製鉄所の製品は勿論、造船所の処分品、貿易部の滞貨品等の委託販売を引き受けるに至り、相当の利益を得て愈々店礎も堅実となる。

浅野総一郎翁に格別に信頼され引き立てられるに至り、小倉製鋼所の製品の一部をも扱うようになって、新店ながら業界に於ける新進の店として信用を博すに至った。

鶴間君が大阪シャーリング株式会社を創立、店を退き専務として経営に当られるに付、取締役に就任する。大正九年、村岡が高血

圧で芦屋に療養するに付、店舗を合併、井上・村岡商店として合名会社組織に改める。

専務取締役　井上長太夫
取締役　浅野義夫
同　富田三之助
同　浅野太蔵
同　鶴間正祐
監査役　小針金三郎

立売堀に店を移す

店が狭隘（きょうあい）になったので立売堀五丁目に移転をする。浅野製鉄の端板処理の為、浅野義夫氏と共に浅上商店を創立、弟長衛を支配人として東京日本橋材木町に開店する。

大阪、東京何れも極めて好調に発展を続ける。大正十三年、東京にシャーリング工場の建設を計画する。浅野製鉄とタイアップして端板を有利に処理すべく計画、深川に工場が竣工して明日開業式を行うという大正十三年九月十日、関東大震災にて全焼、大蹉跌を来たす。大正十五年、鈴木商店の倒産に端を発した財界パニックにより沈滞期の売れ行き不振で金融難に陥（おちい）り大阪シャーリングが支払い不能の窮状に追い込まれ、之が再建に協力せねばならな

東京シャーリングの本社事務所

くなり大阪シャーリング東京支店を分離して浅野製鉄、東京の問屋、入丸小針氏等の協力を得て、新たに東京シャーリング株式会社を創立するに至り、浅野側の強い要望があって経営を引き受けなければならなくなり代表取締役専務を引き受ける

（東京シャーリング五十年史によると「一人一業を信条とする井上は既に鉄鋼問屋を経営していたので会社の設立には協力を惜しまないが責任ある地位につくことには固く辞退するとの意向をみせていた。しかし井上の手腕を認めていた浅野総一郎は井上の参加しない会社への出資は承諾せず、あくまで『井上がやるなら』という条件付きで出資を引き受ける態度をくずさなかった。そこで井上もついに最高責任者である専務の就任を決意した」とある。当時、原始定款には、会社を代表すべき専務取締役一名をおく、と記録されていて、まだ社長制はとられていなかった）

これが為、浅上　対　製鉄所　の取引関係がシャーリング　対製鉄所　に代り、浅上商店にとっては既存の商権を犠牲に供する結

月島工場の荷揚げ作業

果となり大変な不利であるが、東京の同業者からあれこれ疑惑を持たれたが忍ぶことにする。東京シャーリングの経営を引き受けて以来、個人の利害は度外視して新会社の為に努力する結果、業績順調に進展していった。

昭和四年、金解禁に因る経済界パニックにて全シャーリング業界の滞貨漸増、八幡製鉄との間に値上交渉、浅野　対　八幡　との耳付戦ともいうべき鋼板の乱売競争が激化、その間、日鉄も浅野との間に挟って非情な苦労を重ね非常に悩んだが三、四ヶ月で協調が成談、無事に切り抜ける。

昭和六年、社の礎も堅まり業績も安定したので尼崎製鋼を創立すべく社長を浅野義夫氏に譲り、監査役になって大阪の同志と語らい尼鋼の建設に全力を注ぐ。

尼崎製鋼所の建設

取締役社長　井上長太夫
常務取締役　浅野　義夫
常務取締役　平岡富治
取締役　井上好三郎
取締役　井上光次
取締役　飯野浩次
取締役　千葉金三郎
取締役　楓　英吉
取締役　久保田權四郎
取締役　森下彌三八
取締役　末兼　要
監査役　多田甚太郎
監査役　北島安太郎
監査役　島田徳太郎

尼鋼創立に至った動機と商売人である僕が何故に東京シャーリングを辞めてから店本位の商いに専念しなかったかというと・・・。あるとき小倉製鋼所に行って丸棒の圧延を職工が汗を滝の如く流して働いているのを見て感激させられたことと、商売人はその汗の結晶を口先で取り次ぐだけで利益を得ているが社会公共的に見て社会にもっと貢献するには物の生産者とならねばならぬと深く考えさせられたこと。及び当時宇治川電気では電機が余って余剰水力を棄てている状態だったので負荷率によっては料金を大幅に下げることが可能との話があり、早速電気炉の研究を始めたところ平炉の燃料の石炭と比較すると電気炉の方が建設費が安くなる分、有利となり十分平炉に太刀打ち出来ると考えた。尚、将来特殊鋼に向かって進み得るから電気製鋼を企業化しても十分成算が立つと確信を得るにいたったこと等が尼崎製鋼所創立の動機付けとなったのである。

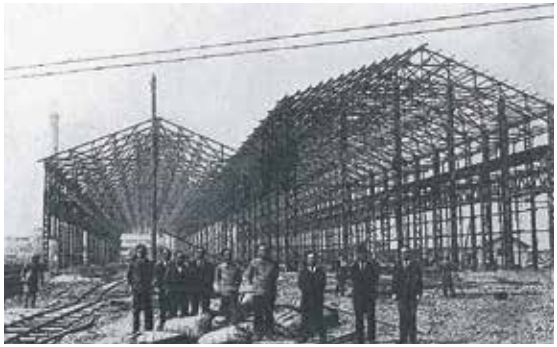
先ず浅野義夫氏の好意により工場敷地五千坪を尼崎築港株式会社

本社事務所

より年賦で買い入れ、千葉金三郎他、友人の賛成を得て資本金三十万円の株式会社尼崎製鋼所を創立するはこびにこぎつけ、設備関係は東京シャーリング株式会社の工場長であった平岡富治氏に一切を任せる計画を薦め、電気炉並びに所謂機械の全部は三菱商事の好意的引き受けによって牛尾製作所、戸畑鋳物株式会社にそれぞれ発注、全部の準備が完了したのである。

昭和六年暮れに発注、翌七年五月に地鎮祭を挙行、同年十二月、工場完成、作業開始を見るに至った。恰(あたか)もよし、政府の金輸出再禁止を転機とする我経済界の好転に加え、満州事変の勃発に刺激せられ鋼材市場は頓みに活況を呈し、幸さきよきスタートを切ったのである。

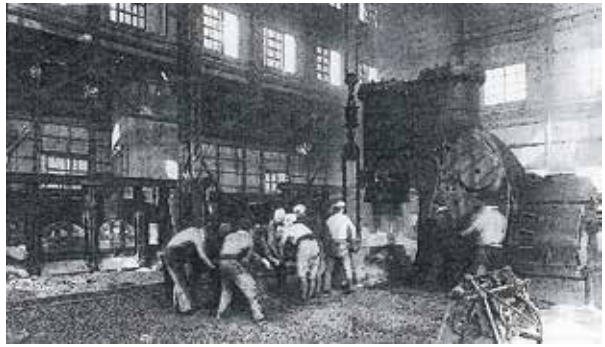
当時は尼崎築港が漸く埋立工事に着手したばかりで芦が一面に生え茂っていた泥地が今は我国屈指の躍進工業地帯となり、今日のごとき殷賑(いんしん)をきわめているものがある。工場完成とともに平岡氏も東京シャーリングを退いて力を添えてくれることになり又、千



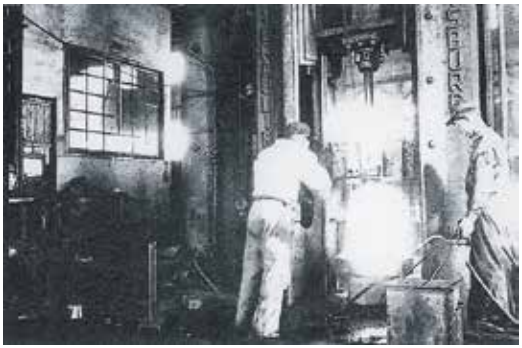
葉、村岡、大黒など若い社員も力を合せ全く汗みどろになって働いた。その甲斐あって業績もすこぶる順調に進展したが何分少額の資本でもって運営せねばならぬので計算上では利益勘定で合っていても現金は残らない。いわゆる「勘定合って銭足らず」で決算期における株主への配当金も約束手形で支払うような状態で金融には人知れぬ苦労を体験した。

何しろ資本金三十万円で鉄骨の工場を建て、しかも電気炉八トン二基（自動調整機三千キロ変圧器を備えたもの）、小型圧延機二基（主要電動機八百馬力、三百馬力）、その他作業に必要な付属設備一切と水揚設備まで整えたのだから、運転資金は皆無の有様で少しでも生産の予定が遅れると忽ち支払いに窮し、重役各位の協力を仰いで切り抜けることが常であった。

先に述べた通りの経緯であるから、電気製鋼についての経験があった訳でもなく、また特にすぐれた技術者がいたのでもなく、最初は牛尾製作所（電気炉メーカー）の東氏を指導者として、他はほ

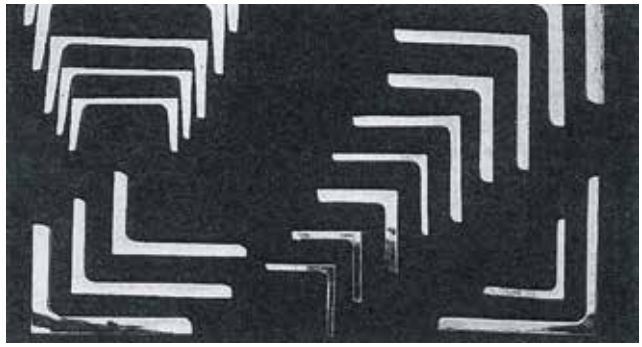


とんど素人ばかりの工員を郷里から集めて来て操業にかかったのだから、なかなか思うがごとき製品は出来上がらない。圧延機にかけると延びることは延びるが、品質が一定しないので中には「ハードスチール」のような固いものも混ざるという始末で、得意先からの苦情が絶えない有様であった。それでも、どうやら鉄筋用の丸棒だけが出来るようになったので進んで特殊鋼の分野に向かって進出すべく志したのであるが、工場の技術がこれにともなわない。研究の余裕を与えれば可能な問題であっても月々の収支に追われているからそれが許されない。彼方、此方で教わったことか聞き齧ったことなどを口移しで鞭撻したり研究の資に供するくらいであった。なんとかして相当な技術者を求めたいと奔走しても会社が貧弱なため来てくれる人がいない。詮方なく日鉄の特殊鋼課に頼んで実習させてもらったり指導者の派遣を乞う程度で、あらゆる苦心を重ねたが技術の向上は遅々として進まない。いくら素質の良い技術者であり優良な工員であっても、それを錬磨し



てくれる指導者を得なければ向上は望めない。優秀な指導者の得られないことが私の最も悩まされた問題で、また従業員に対して気の毒でもあり不憫でならなかったのである。

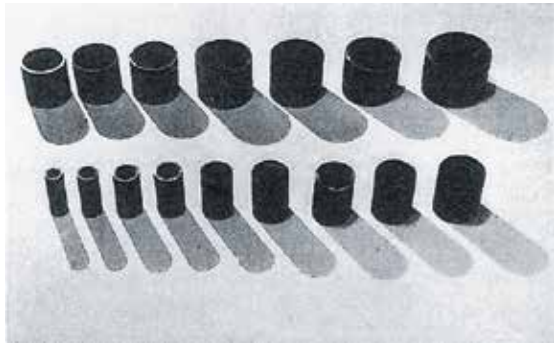
今日、特殊鋼界は需要の急激な増大により画期的な発展をなし、技術も又、著しい進歩を示しているが、当時は需要も少なく優良な舶来品に圧倒され、メーカーは日鉄を除いては僅かに数指を屈するに過ぎず、その生産量も僅少でまことに不振な状態であった。加うるに問屋は舶来崇拝時代で削岩機、刃物、工具鋼の炭素鋼に至るまで全てが輸入品に依存している有様であり、駆け出しの尼鋼が特殊鋼の製造を始めるなどは「身のほど知らず」のきらいがあった。しかし私は斯業の将来性を考察し、万難を排してこれを進めるべく努力したのである。多少の犠牲はもとより覚悟の上であり、いろいろの試作を命じ研究を重ねたけれども注文が少ないために連続して作業を行うことが出来ず、折角幾分馴れて「しめた！」と思ってもまた普通鋼に逆戻りせねばならぬようなことで



容易に成果が上がらない。そのうちに電力料金の更改期が来て、従来の八厘が一銭二厘に引き上げられることになったので、普通鋼を造っていたのでは採算が芳しくなく電力消費量をトン当り五百キロに、又カーボンの使用量も十キロに引き下げないと算盤が持てないから工場に向って無理な要求を出して研究せしめたが、これも結果が面白くない。このような状態で推移すると事業の継続困難におちいる恐れがあると考えたので特殊鋼の研究は後日に譲り、積極的に普通鋼に集中すべく方針を定め、平炉二基と中大形工場を新設することにした。

平炉の新設と鋼管製造に着手

昭和九年八月、平炉火入式を挙行、中大形工場も試運転開始の運びにいたったのであるが折柄、同年の津浪で全工場は一メートル以上の浸水となり惨憺たる被害を受けた。このときばかりは少しがっかりしたが、勇を鼓して所員一同とともに不眠不休で復興に

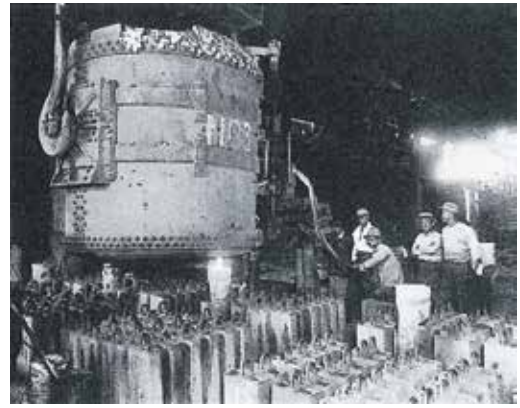


努め約二ヶ月後に運転を再開することが出来て、この災難を切り抜け得たのである。

当時大形製品は日鉄の独占分野だったから随分と気苦労も多かったが、幸い問屋有力者の協力もあって業績は順調な進展を辿り、基礎も漸く安定の域に入った。

昭和十一年、製鋼技師　山田貞雄君が「ホローインゴット」よりパイプの製作を研究中、小田切延寿氏の慫慂もあって鋼管製造に着手することに決定、資金調達のため末兼要氏の斡旋で久保田鉄工所社長　久保田権四郎氏の賛助を得ることになり、資本金を三百万円に増資の上、機械は三菱商事を経てドイツデマーク社へ発注するとともに、私は機械の見聞かたがた欧米視察のため同年六月外遊した。

この欧米視察で鉄鋼界の盛況を親しく見聞きするにおよんで彼我の懸隔の甚だしいのに驚くとともに屑鉄製鋼法より脱却し鉱石からの一貫作業に向って企業を高度化せねばならぬと心ひそかに決



意を固むるに至った。

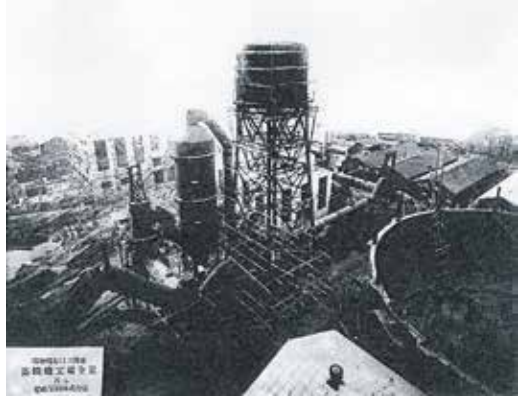
日本鋼管より呼びつけられ中止するよう勧告を受けたが、既に機械も発注済のことであるからと応じなかった。また米国よりの帰途、秩父丸船中にて故渋沢正雄氏に面識を得たのが縁となり、十二年に日本鋼材連合会の結成に当り、大阪代表として参画理事となった。

帰朝後、間もなく世界的に原料不足が顕著となり、また欧州方面よりの買付けが多量に上るとの理由により、米国スクラップの値段は入電ごとに昂騰をつげ、鋼材界は頗ぶる活況を帯び、相場は奔騰して僅か二、三ヶ月の間にトン三十円以上の暴騰を示し、自然尼鋼の業績もその恵沢に浴すること甚大であった。斯くして第一次欧州大戦後の反動ともいうべき鉄鋼界の萎び不振も世界的に一陽来福、いよいよ好調なる景気上昇期に入った。そこで鋼管工場の材料自給にあわせて更に平炉二基の増設に着手、資本金七百五十万円に増額し、尼鋼の株式を初めて市場に公開したとこ

ろ、環境の良化と相まって一時は株価百二十円と唱え時運により積年の力斗に花が咲き、株主に対しても些か報いることが出来たのである。

昭和十二年七月七日、日支事変が勃発、戦局の拡大するに従って鉄鋼界は異常なる盛況を見るにいたった。恰も良し新鋭の鋼管工場、平炉拡張工事の完成を見、更に又、尼鋼操業以来の懸案だった特殊鋼の製造について顧問として指導を託していた蒔田工学博士の部長就任以来、面目を一新、技術の向上、進歩に見るべきものあり、構造用鋼などの優良化はもちろん、時間に呼応し研究部の充実をはかり、「浪速鋼」なる名称の新鋼に成功し、軍部よりの特需をうけるにいたり、漸く所期の目的を達成するの域に入り、尼鋼事業に一段の光彩を添えた。

かくて社運の隆昌とともに業績また飛躍的な好調を示し、社礎いよいよ強靭となった。



尼崎製鉄株式会社の創立

先の欧米の鉄鋼業界視察で認識を深めた高炉建設について帰朝早々久保田権四郎翁を説いて久保田鉄工、尼崎製鋼所両社の原料銑自給を目的として昭和十二年八月、資本金五百万円折半出資の尼崎製鉄株式会社を創立、久保田から川端氏を技術担当常務として迎え入れ、川端氏のもとで高炉の建設が進められ、昭和十三年七月、地鎮祭を行い昭和十六年六月、工事完了。名士多数を招き盛大なる火入れ式を挙行、銑鋳鋼一貫体制の実現を見たのである。最初、三菱日本化成と提携、コークスは同社より供給を受ける予定の下に高炉だけを設備する計画であったが、たまたま樺太に粘結炭を、朝鮮に鉄鉱石の山を所有する鐘淵実業の参加を得るにいたり、コークスの自給を計ることに変更、資本参加を得て津田信吾氏の協力を得る。

この頃、昭和十三年十二月、隣接の大阪製板株式会社（元大阪シャー

リング株式会社）専務鶴間正祐氏の逝去により尼鋼への吸収合併が急進し、北島安太郎氏と仮契約を結び、翌十四年十二月一日をもって合併。尼鋼の資本金は壱千弐百万円となり製品に厚板、薄板を加える。

満州事変（昭和六年）は日支事変（昭和十二年）となり、遂に大東亜戦争（昭和十六年）に拡大するに及び昭和十八年、軍需省の所管となり軍需産業として要請に応え尼鋼・尼鉄を合併、社長に就任、熾烈なる戦時下生産責任者として奮闘する。

資本金　五千八百五万円
銑鉄生産高　十五万トン
各種鋼材圧延能力　五十万トン

の尼崎製鉄株式会社となる。

昭和十九年、米英の海上封鎖に愈々原料の鉱石、石炭の外地よりの輸送困難の度を加えるに従い、操業率は低下、遂に十九年夏、

製鉄所作業の休止のやむなきに至り、高炉はバンキング（コークスをつめて送風を止める）することになった。従業員は満州鞍山製鉄へ挺身隊として派遣する。

その後、戦況は日を追って不利となり、遂に操業中止やむなきにたちいったので事業を製鋼所中心に移し、平岡富治氏を社長とする合併前の尼鋼に分離した。

昭和二十年八月、周辺一円の大空襲により一〇〇キロ、五〇〇キロ爆弾六十八発を受け、工場内は蜂の巣の如き惨状を呈し、製鉄所は再起不能となる。幸い負傷者は一人もなくて幸せであった。

大東亜省より北支唐山製鉄所または張家口製鉄所のいずれか引受方慫慂あり。二十年一月一日出発、現地を視察したが、とき既に敗戦の色濃く、とうてい見込みなきため、これを断る。帰途雪深い鞍山製鉄所にたちより挺身隊員の健斗を慰問する。

八月十五日、詔勅によって終戦となり、国内は混乱の状態を呈す。従業員を戒め一糸乱れざる体制を以って成行きを謹望する。

終戦処理

昭和二十一年十二月、佐々川、正木両元海軍中将の斡旋により、敗戦による兵器の処理に協力する反面、地方産業復興の先駆けともなればと呉海軍工廠製鋼部の爆破された後を引き受け、昭和二十二年四月、尼鉄呉作業所として発足す。

その頃、呉の市街は一面の焼野原で港は爆破された。巡洋艦　青葉の他、多数の艦艇が残骸を曝し、洵に凄惨荒涼たる状況であった。終戦間もない時で呉に出張するにも汽車は超満員で争って窓から飛び乗り新聞を敷いて床に座る。身動きができないから氷のうをシビン代りにする有様で米を十日分、登山用ズックに入れて行ったものである。

英軍の管理地区で豪州軍の兵が映画で見るカウボーイの如き雄姿で警備に当っていたが夜の外出はなるべく差し控えるようにとの事であった。幸い正木顧問の知人、山田村一氏の宅で大変世話に

なり開場準備を進め、昭和二十二年四月三日、市長初め有力者多数を招き盛大な作業所開始の披露宴を挙行したのである。

終戦処理委員会より引継ぎを受けた従業員数は元大佐級以下六百五十名には相当有能な技師もおり、其の他の従業員も海軍の伝統で長年養成された信頼の持てる人達で組合長熊本氏の歓迎の辞に尼鉄の呉進出を見たことは我々にとっても暗夜にともしびを得た思いで組合員一同安心して大いに力を合せ、企業の発展に尽したいと挨拶があり労使、和気あいあい和やかなスタートであった。

昭和二十二年一月一日付、G項該当戦争協力者として追放処分を受けたので呉作業所の開設披露宴をすませた後、尼鉄は千葉雄二氏を社長に任じ、又尼鋼を合併前の姿に分離して平岡君を社長に任じる。

昭和二十二年四月、尼鋼、尼鉄より退陣恭順の意を表し蟄居する。

明光証券創立

昭和二十三年四月、同業社長連中の追放者ばかりが六禄会をつくり三菱信託ビル三階を借りて時々集会の場所とする。元の職場、事務所等の出入りを禁じられているので社員連中との連絡も束縛され時々現役社長達と会食や情報を交換するに過ぎない。大日本造機の木村寿雄君の勧めで当時証券の民衆化に乗り出し企業資金の導入に協力してはとの話で追放組と祭原、山中氏等有力者の参加を得て昭和二十三年四月、資本金三百万円の明光証券株式会社を創立、社長に就任、新しい分野の営業を始める。

経済界の復興を緒に付ける為と資金導入の必要から歓迎され、反面投資家の水先案内として良心的経営を買われ、予想以上に順調なる進展を見るに至ったのは幸いであった。

追放解除で尼崎製鉄に復帰

昭和二十六年六月、追放解除を受けるに及び、尼鉄に迎えられ相談役に復帰する。尼鉄に復帰を機会に明光証券社長を辞し、戦災で廃墟に等しい製鉄所を何とか復興したいものと苦心を重ねる。明光証券に勤務中、同和鉱業株式会社社長　久留島秀三郎氏より飛行機とバスの窓からと題した欧米旅行記を贈って頂いていたのを何気なく読むうちに、インドの鉄鉱石にふれたところで、「日本は鉄源皆無に等しい貧乏国でありながら硫化鉄鉱を焼いて硫酸をとった残りの鉄分六十％もある物を単なる滓として統制価格三百五十円に抑えて、それ以上には買わない。それでは運賃にもならないので埋立に使っている。実に馬鹿な話だ・・・」と憤慨した話が載せられていた。尼鉄に復帰、復興に着手した今、この記事にヒントを得て粟村鉱業所社長粟村敏家氏に紹介して頂き久留島氏に面会、硫酸滓利用による鋳物銑製造に付き意見を交換し、

尼鉄復興に協力を懇請したところ、早速調査員を派遣された。結果、援助方を快諾され、大阪造船所社長　南俊二氏所有の尼鉄株式総数の約半数を肩代りして名実とも大株主となり力強い後援を受けることになった。さらに高炉再開について今一つ大きなポイントであった開銀融資について富士製鉄社長　永野重雄氏の非常な力添えのあったことを銘記しなければならない。私と永野さんとは特別に懇意だった。

永野さんが大学を出て川崎の富士製鋼の支配人になったときから知っていましたので、富士製鋼の製品をはじめて世の中に出したのが私のところの東京の浅上商店だった。そんな関係で手形を貸してやったりしたものだった。そんな関係もあったからだと思うのだが、お骨折り頂いて開銀から二億円の融資を受けることが出来たのだと思う。この開銀融資が決まったお陰で市中銀行の六億円融資もすらすら実現し、全力を工事の進捗に打込む。

尼鋼の協力と共に一躍三倍増資を決行、昭和二十八年四月一日、

歴史的な再建成っての火入れ式を挙行、朝野の名士数百人を招待、盛大なる再興行事に一同歓喜の涙の下に感激そのものであった。

着工後、まる一年間で計画通り予算の狂いもなく竣工せる。蔭には廃墟の工場を管理に当って居た黒住部長の六年間の管理中、今日あるを夢に画いての周到なる調査企画と従業員の真摯なる協力の賜物と思う。

操業開始後の業績も頗る順調に進展を見た。尼鉄の操業開始に続き同和鉱業に於いては隣接地に鉄源として有害なる銅分を脱銅する設備がつくられ、硫酸滓に残含するものを取り除き鉄分六十％の富鉱として供給を受けることになり最も有利確実な原料を確保し得たのである。これにより従来、埋立等に棄てられていた未利用の鉄源が活用されるにいたり、大きく国益に寄与することになった。

尼鋼の労働争議

（我国労働史上稀に見る大争議）

追放中の五年間は尼鉄・尼鋼との連絡は断絶し、その経営内容は全く不明であった。尼鉄はさておき、尼鋼は朝鮮事変の余波で相当高収益をあげているものと安心していたが尼鉄の再興がなり、いよいよこれからというとき、昭和二十八年五月二十日、私が呉からの帰りを神戸駅に尼鋼の常務が待ちうけており、擬装せる経理内容とともに五月末の株主総会が監査役の承認が得られず開会不能におちいっているから是非これが切抜けに協力するよう懇請を受けたけれども、前述の通り尼鉄の復興が漸くなった直後であり固く辞退した。

株主総会を控えて対策に窮せる結果、平岡社長初め各重役交互に懇請に来訪、はては久留島社長にまで了解を求むる等、狂奔せるは状況を見て自分の生んだ子供であり、育てあげた者の窮状を見

ては黙視することも出来ず且、尼鋼が倒産すればひいては尼鉄にも致命的な打撃を受けるは必定であるので僕の生涯を失うかもしれないが、西郷さんの心境になって討死覚悟で応諾、取締役会長を引受ける。

株主総会はかなり騒々しかったが僕が取締役会長として建直しに当ることで無事に終る。

会長に就任後、会社の全般に渡り業態調査を行ったところ聞きしに勝る不良内容で驚愕した。たたけばたたくほどボロが出て十九億円以上にのぼる大赤字である。何が原因でかような不良会社にしたか大別すると

・社長の優柔不断

・幹部役員の軋轢（あつれき）（生産と業務を担当の両常務）

・放漫経営による社内の混乱

・労働組合の強権

等であるが、社長の理念たる高能率、高賃金が実態は低能率、高

賃金に起因すると思う。

三和・神戸両銀行より六億の融資を受け建直しに努力せるも折柄のデフレの浸透に市況漸落を辿り採算上徹底的に企業の合理化を計る必要を痛感、経営権、人事権の掌握を確立する。次いで昭和二十九年一月、会社の業況を詳さに説明、真裸の数字を示して一時賃金を一割五分引下げを提案、交渉に入る

再建策として

・銑鉄価格の引下げ

・金利の低減

・経費の節約と賃金の一時的引下げ（十五％）

を提示、組合との間に交渉を持つこと数回、既得権として頑として応ずる気配なく条理を画せる会社要望に遂にストライキを以って対抗、総評本部の強力な後援と外部団体の応援に依って悪質な

出荷を差し止めて作業は部分ストを続ける。それでなくても金融の苦しい会社は出荷を妨害され金融の途を塞がれたので、五月末遂に銀行側より不渡処分を発表せられたるも組合は擬装倒産なりと依然熾烈な闘争の展開を続けた。

この間、徹夜の団体交渉を熱心に然も誠意を込めての話し合いも効果なく、反省の気配もないので会社は工場閉鎖、全員解雇の決意を固める。

労働争議の結末

終戦後の左傾思想によって労使関係は可成り歪められている。組合運動の行き過ぎを戒め、健全、合理的たる労使の在り方を確立せざれば日本の産業界はつぶされてしまうであろう。更に尼鋼に於いては組合の改革反省なくては再建困難であるから、絶対後退はしないとの決意で強固な態度であった。六月末、漸く組合内部

の結束が乱れ会社の現状認識と共に妥協に向って来たので、兵庫県労働委員会を仲に斡旋させて退職金全額を支給する事で全員解雇とする。

退職手当三億五千万円は現物支給とし鋼材を渡すことにする。平岡社長が全員を集め決別の挨拶をする。この日降りそぼる雨に二十年、苦楽を共にせる従業員との別れに相応しい劇的場面であった。支払停止、閉鎖に続いて大阪商工会議所にて債権者会議を開催、債務切捨てと再建協力を懇請する。数度の交渉にて債権者の内、二、三強硬なる分子を除き理解ある協力を得る事になり十一月、ようやく整理一段落、再興に専念することになった。この間、債権委員　木村氏、日立の大本氏等の大変な尽力に預かった。

尼鉄は尼鋼倒産によって銑鉄の売場を失い、最低操業によっても尚且つストック漸増、場内は置場にも困る状態になった。国内需要はデフレの強化で不振の度を増しやむなくアルゼンチン向けに一万トンを安値で引受け、一時の金融を切抜ける。

尼鋼のスト対策は会社建直しの為、やむを得ない強硬策で臨んだまでであるが、一面労働運動の反省を促し正しい労使関係のあり方を正常化して産業界に寄与したいという犠牲的精神もあったので、経団連、日銀、鉄連等もデフレケースとして見守っていた。尼鉄の窮状を訴え銑鉄部会の援助を求めたが最悪の市況で各社共、減産の上にストックの漸増で他を省みる余裕がないありさまであった。

関西に於ける大口銑鉄需要者といえば神戸製鋼所か久保田鉄工よりないが神戸製鋼所浅田社長に協力方申し入れる。大株主である同和鉱業久留島氏と神戸製鋼所の三社会談の結果、神戸製鋼所に経営権を委ね尼鉄現役員は辞職するよう迫られた。全責任は僕一人にあるので他の役員、従業員には何ら退かねばならぬ理由はないと、折衝を重ねたが、遂に入れられず総辞職して会社の安泰を計るべく因果を含める。引継後の責任者として僕が取締役に残り、黒住を除く他の役員は退職する。

三社協定に従う

思えば昭和十二年、会社創立以来悪戦苦闘の戦時下より戦禍による長期の忍苦を経て、漸く再開の喜びを見て僅か二年僅差の夢で同志将来の希望を失わしむるは真に堪え難き思いであるが、斯くせざれば企業の存在が危ぶまれる身を殺して企業を獲り多数の従業員の生活を保証することこそ私の取るべき最善の道と考え、潔く三社協定の決定に服し明渡しを承諾する。

尼鉄の引渡しを了とし尼鋼の整理再建に専念する。昭和二十九年十二月債権者に第一回返済を終り、三十年の春を迎え事業を縮小、最低の経営体制で再開を銀行側に進言せるも言を左右にして承認せず、参考資料を作成させられる毎に神戸製鋼所の検討を求むるの始末、二月に至り諸般の情勢上、神戸製鋼所に経営を任せたいから会長として残り第一線より退くよう申し入れがあり尼鉄との関係、銀行側の意図を汲んでは僕が無理に強硬な腰で押して行っ

ても第一、支払停止処分の解除、銀行取引の再開、再開資金の調達等幾多の至難な問題があるので涙を呑んで応諾、二月二十日、神戸製鋼所側に経営権を引き継ぎ尼崎製鉄は山野上社長に、尼鋼は町永社長に引継ぎ私は退くことにした。

資本主義経済で資力によって牛耳ざるは止むを得ないが端を尼鋼の立直しに発し、何等内容的欠陥もなき尼鉄を手放し、更に混乱せる尼鋼を整理再興の膳立をして人に任さなければならぬとは不徳の致す事とはいえ、井上の半生を捧げたる生命を絶たれたも同然で尼鋼会長に出馬せる時の予想どおり西郷さんと同じ運命でもある。

人生夕陽を尊ぶ

年既に還暦を過ぎ、なまじっか鉄鋼界の井上と多少は人に知れて

いるだけに時の到来まで悠々自適、余生を送らんと欲す。

十五歳にして川合商店に丁稚奉公に勤めて満五十年、各方面の知己、先輩諸氏の御愛顧を戴き後生に然る事業を起こせたのは幸福といわざるを得ず。健康に恵まれ余生を楽しむことの幸せを感謝する次第である。

事業は人であるとの格言をしみじみ感じる。

幸い立派な後継者に恵まれたことに感謝すると共に神戸製鋼所、同和鉱業、金融機関三者の強力な支援の下に尼鉄・尼鋼の一層の発展と多年苦楽を共にせる同志後進の人々に幸あれかしと祈って筆を止む。

（満六十五歳）

井上専務渡欧記念の碑

昭和十一年、尼崎製鋼所の鋼管製造のため発注した機械の見聞かたがた欧米視察したとき記念に建立された碑である。この時見聞した欧米の鉱石からの一貫作業のあり方に感動、我国もそうありたいとの決意を固めたという。

神鋼鋼線工業の「安全の森」に建立されている
元尼鋼　井上専務の渡欧記念の碑
（当時はまだ社長制はとられていなかった）

株式会社福田博商店本社に鎮座している

尼崎製鉄第一高炉（溶鉱炉）火入れ記念の碑

昭和十六年六月七日　久保田鉄工社長　久保田権四郎氏と尼崎製鋼所社長　井上長太夫氏が久保田鉄工と尼崎製鋼所に銑鉄を供給する目的で銑鋳鋼一貫体制の実現を目ざして尼崎製鉄を創立、溶鉱炉の火入れを記念して建立されたものである。

碑文「外国（とつくに）におとらぬものを造るまで、たくみのわざにはげめもろ人」は明治天皇の御製で八十二年前、民間人として高炉（溶鉱炉）の建設に夢をかけた二人の思いがしのばれる。

碑文は
陸軍少尉契村拓次謹書とあり
裏面には
皇紀二六〇一年六月七日
第一熔鉱炉火入之日
社長 久保田權四郎 建立と 刻まれている

井上氏、大いに語る

おもいで1

（鉄鋼新聞の昭和四十五年十月十六日付
「長老対談」井上氏、大いに語る（下）より転載）

――前略――

――組合も行き過ぎがあったようですが、尼鋼がつぶれた原因はどこにあったんですか。

わたしは幹部が悪かったと思ってます。二億や三億ならともかく十九億円、二十億円の負債がわからないはずはない。それまでに何とか防げたはず。いろいろあったが結局、わたしの提案を銀行など債権者がのんでくれればなんとか再建することができましたが、銀行からみたら井上は一方的に自分の主張ばかり通しすぎた。おまけに三億何千万円にもなる退職金を現物で支給したなんて無茶する奴はどうにもならんと思ってたでしょう（笑い）

――どういうわけで最後は神戸にいったんですか。

銀行の依頼です。

そう、神戸にしたら尼鋼なんてどうでもいい。尼鉄が欲しかったわけだ。だから尼鉄は尼鋼を整理する一年前に神戸に渡し神戸から山野上さんが社長としてきていた。

――尼鋼は整理に入り尼鉄は山野上さんが社長に就任、尼鋼も町永さんが社長ということで形はつきましたが井上さんはそれ以降、鉄鋼界を引退なさったわけですね。

そうや、三十三年だったから十何年か経った。

――鉄鋼業はその後、飛躍的な伸びを示しましたが、こんなに大きくなると思われましたか。

鉄の将来については悲観していなかったが、こんなにまで伸びるとは予想もしなかったですね。二十五年ごろ百四十三万トン、三十年　五百四十五万トン、四十年　四千六十万トン、四十三年

が七千万トンだから四十年から五年ほどの間にぐーっと伸びた。しかも高炉の規模が四千立方メートルなんて巨大なものだから驚きだ。

この前、神戸の加古川の火入れで行きましたが立派なものですわ。わたしらがやったころとは雲泥の差、ほんとに感慨無量です。

――これだけの規模になりながら、いぜん無駄な競争がなされたり、どうもおかしい面もありますが、いまの鉄鋼業のやり方についてお感じになる点がございますか。

大いにあります。鉄鋼業ばかりでなく日本の企業はもっと国際的になったらよいと思います。

鉄鋼の場合、これだけ伸長したのも開銀融資のおかげ。各社とも三千立方メートル、四千立方メートルの高炉をつくるといったって、どこも自分の金ではやってませんよ。みんな開発銀行とかバックの銀行の融資による。

――いまの世界銀行ですね

住友は住友銀行、鋼管は富士銀行、川崎は第一というように、みなうしろに銀行がついている。もし鉄鋼会社がつぶれたら銀行もバタバタと倒れてしまうよ（笑い）。だからもうちょっと自重すべきだと思いますね。

――明治三十八年に川合保蔵商店に入られてからだと五十年以上鉄の仕事に従事されたわけですが、この間いちばん楽しかったという思い出といったらどんなことでした。

わたしは幸いなことに一度も失敗したことはなかった。だからつねに楽しいことばかりですわ。

東京シャーリングの経営、久留島さんとの出会い、それに友だちには恵まれました。入丸の富田さん、大阪シャーリングの鶴間くんとは無二の親友でした。富田の養子はわたしが仲人をしてやりましたよ。

――尼鋼の最後の時はつらかったでしょう。

最後はいくら懸命になってやっても労使間が完全に割れているうえ、再建しても資金的にそれまでのようには出来ない。だから神戸にまかした方がよいのではないかと腹を固めたから、つらかったというのとはちょっと違う。神戸にわたすと企業は生きる。しかし私がやっておったんでは企業まで死んでしまうとわかりましたから。わたしはわたしほど幸運児はないと信じています。尼鋼であんな風にして第一線を退き苦しかっただろうとご同情くださるが、それは楽しいことでいっぱいですわ。尼鋼を辞める時、久留島さんが井上くん気の毒だというんで尼鋼の六甲の麓の土地を神戸と話し合われてくれたんですわ。この土地は大谷というえらい坊さんの土地で山でしたが、そこで弟子を教育しておられた。ところが火事で寺が焼け、そのまま放置されていたのをわたしが頼まれ戦時中イモ等食糧をつくっていた。戦後も三百万円ぐらいで会社で買うて管理人を置いておいた。その土地も久留島さんが老後の糧として牧場にでもしろといって神戸と話し合ってくだ

さった。

二十何万坪もおまんで。その時分は、ま二、三千万円程度のものかと思っていたんで一億円にもなったら売ろうかと管理人と話していた。ところがその後、管理人がやってきて一億円で買い手がつきましたというてきた。一億なら安いなあ（笑い）といったら、あんた一億円なら売るいうたじゃないか、というんで売っちまった（笑い）。

――中略――

――腰をちょっと悪くなさったていどでお元気そうですが趣味の方はいかがですか。

ゴルフの方は止めましたが、いま詩吟をやってます。詩吟は短いでしょう。どうも長い小唄とか常盤津とかいろいろありますが、よほどうまくならなければあきまへん。大阪倶楽部と清交社でならっていますが、両方とも三十年以上の会員ですから名誉会員ですわ。週一回習っています。勉強は午餐会に出席して講演を聞いていますよ。

――後略――

おもいで2

（宝塚ゴルフ倶楽部四十年史座談会より）

晩年の井上長太夫翁はゴルフをこよなく愛し、宝塚ゴルフ倶楽部の運営にも深くかかわり大活躍でした。倶楽部の四十周年記念誌より記念の座談会の一部を抜粋引用して活躍の模様と人となりを紹介します。

――――　前　略　――――

井上　新事業計画（新コース十八ホールズの開設、クラブハウスの新築と土地買収など）の費用が当初三十一年十月の臨時会員総会で承認を得た予算額を大きく超過し約四億円の資金不足を生じ、会員の一部有志から批判の声が高まり評議員諸氏にゲキを飛ばすなど内紛が続いたので、茶谷理事長の発言と理事会の申合わせによって理事、監事が総退任することになりました。後任理事長の

井上長太夫氏

人選についてアレコレ協議が重ねられたようでしたが適格な方が得られず、ついに東京の鹿倉長老に出馬を乞い事態の収拾を懇願したのですが、鹿倉さんは東京放送の現職社長として寧日なき繁忙のなかで迷惑なことだったでしょうが、事態を深く憂慮されて倶楽部を愛せられるご心情から引受けられたと思う。理事長（キャプテンを兼ね）就任を承諾する条件として私に名誉書記と理事長代理を、いまは故人となられた中坪さんに名誉会計とキャプテン代理を引受けさせるよう、もしこれが容れられないなら「おれは理事長の引受けはごめんだ」と文書をもって伊藤幸憲氏に申入れがありました。

私は鹿倉さんと面識はあったが親しくことばも交わしたこともなく、なぜ白羽の矢を立てられたのかわからず、その上理事の一員として辞任を届け出てあるので、その任ではないと堅くお断りしましたが強い要望で余儀なくお引受けして財政建て直しに協力することになりました。キャプテンの代理はＫＧＵ関係で都合の悪

甘香橋

三たび架け替えを行い、昭和38年6月5日渡り初め式をあげた。一行頭から井上長太夫氏、堀内秀男氏。

いこともあるので後日、寺沢氏が就任せられました。所謂資金の調達については中坪さんとしばしば協議を重ね、特別会費として一億九千万円を全会員に負担願うこととし、さらに新会員の入会金を一億四千万円見込み、残額は経常収支の減価償却引当金と手持資金でまかなうことに決め、鹿倉理事長の強力な指導のもとに熱意をもって事に当たったことと、時あたかもゴルフブームを背景に新入会員も至極順調に応募があり、予想以上の資金調達が可能となり、平常収支の好転と相まって短期的に財政の健全化を得るに至ったものであります。いまにして思うと予算面では大きな赤字でとかくの批評はあったが、膨大な土地を手に入れ立派な施設を新築し、宝塚倶楽部の基盤をゆ

るぎなきものにして将来への発展に寄与された茶谷さんの英断と、雑草生い茂る山岳地を開拓して二ヶ年にわたり新コース開設に尽されたた大橋さんのご苦労は大いにたたえられるべきものと思います。

鹿倉　井上さんね、そこでエピソードを入れたい。私は宝塚の方からも「理事長をやれ」としきりにいわれたけれども実は同時に三和銀行の渡辺忠雄さんが数回きたんです。宝塚ゴルフ倶楽部があんなことでは困るから、ぜひともひとつやってくれといわれていた。そのときあなたの名前が出た。

「井上さんですか。それならば知っています。あの方なら・・・」そんなことがあったんですよ。

――――　後　略　――――

あとがき

昭和十二年（一九三七）、鋼材製造の尼崎製鋼所の社長　井上長太夫と鋳鉄管製造の久保田鉄工の社長　久保田権四郎の二人が両社に銑鉄を供給することを目的に銑鋳鋼一貫体制の夢に向って尼崎製鉄を創立、昭和十六年に操業を開始しました。しかしその年の十二月八日、太平洋戦争が勃発、我国の経済が統制経済に急展開、製鉄所は軍の管轄下に入り、民需の久保田鉄工に銑鉄は供給されなくなりました。

昭和二十九年に尼崎製鉄所が、昭和三十年に尼崎製鋼所も神戸製鋼の系列に入り、昭和三十三年に両社は合併、新生尼崎製鉄所となった。昭和四十年に神戸製鋼所と尼崎製鉄所は合併、神戸製鋼所尼崎製鉄所として鋳物用銑鉄を製造してきました。昭和六十年（一九八七）、神戸製鋼所は鋳物銑の生産を神戸製鉄所と加古川製鉄所に移管することになりました。

昭和二十八年に尼崎製鉄の再火入れと共に設立され、鋳物銑の販売を業としてきた当社は一念発起、これを機会に神戸製鋼所の鋳物技術者のベテラン社員を順次受け入れ、鋳物銑の研究開発を

神戸製鋼所と共同で進めることにしました。紆余曲折しながらも高純度でC（炭素）とSi（シリコン）の含有量を共晶飽和度に調整することによって低融点（一一五〇度）の鋳物銑の開発に成功しました。

「溶解効率の優れた鋳物用銑鉄」として特許三五七七一〇〇号を取得、日本鋳造工学会から「技術賞」と「功労賞」を頂きました。現在、業界では既に月間一〇、〇〇〇トン販売されていますが令和五年から（株）クボタの鋳鉄管の製造を行っている阪神工場に納入させて頂くことになりました。

八十二年前、銑鋳鋼一貫体制の実現を目ざして溶鉱炉（高炉）の建設を成しとげた二人の偉大な大先輩の思いが形は違っても実現したことは誠に感慨無量であります。

令和五年八月 吉日

株式会社 福田博商店
取締役会長　福田　勝

井上長太夫伝

発　行　株式会社 福田博商店
尼崎市大浜町一丁目四三番地
編　纂　株式会社 福田博商店
〇六―六四一六―五三三一
印刷製本　株式会社 ハナヤ勘兵衛
令和五年八月吉日発行
（非売品）

叙勲記念の文鎮